

〈研究ノート〉

趣向と叙景の俳諧表現史Ⅲ

高野実貴雄

要約

芭蕉は深川に隠逸して以来、旅と庵住を交互に繰り返した。旅と庵住は芭蕉にとって生活を芸術化する為の人生の理想を追求するための手段であった。旅の理想は『おくのほそ道』によって、また庵住の理想は『幻住菴記』によって文学化され、完成された。ここに、芭蕉のコアがあると見るべきであろう。

キーワード 芭蕉、発句、連句、旅人、庵住

目次

1. 芭蕉における同義語の構造
2. 芭蕉の発句（以下次号）
3. 芭蕉の連句

1. 芭蕉における同義語の構造

芭蕉（1644～1694）の生きていた時代は連歌から俳諧というジャンルが誕生し、言葉遊びによって滑稽を生み出す初期俳諧から、変風期を経て、詩としての俳諧が確立される時期に当たり、芭蕉自身の表現もそれに呼応するかのように変転して行った。にも、かかわらず、芭蕉の核の部分は、深化はして行ったが、変わらなかったと思われる。それをまず、論じ、次に芭蕉の発句や連句の変転の様について考えてみることにする。

延宝8年（1680）冬、芭蕉は日本橋の近くの小田原町から隅田川のほとりの深川に居を移す。そこがいわゆる第一次芭蕉庵である。天和3年（1683）の夏、前年の暮れの駒込の大円寺から出火した江戸大火（お七火事）で門弟の秋元藩家老邸を頼って甲斐国谷村に流寓の旅へ出る。その年、江戸へ戻って、冬に第二次芭蕉庵へ入る。翌年の貞享元年（1684）の8月には東海道を下って名古屋、畿内を回って『野ざらし紀行』の旅に出、翌年の4月に江戸へ帰着する。第二次芭蕉庵での生活が貞享2年の4月から続き、3年、4年（1687）の10月まで続くこととなる。

10月の末に江戸を出立して、いわゆる『笈の小文』の旅に出る。12月下旬、伊賀に帰郷、そのまま越年して、翌年の元禄元年（1688）に伊勢山田、三河、吉野、奈良、大坂を経て、須磨、明石を巡覧、兵庫を経て京に入り、大津から岐阜に入って名古屋より、木曾路に入り、中仙道を通して、8月の下旬に江戸へ戻る。明けて、元禄2年、正月早々、兄に北国行脚の予

定を告げ、3月下旬から、奥羽行脚（『おくのほそ道』の旅）の途に就く。

8月の下旬に終点の大垣に到着し、その後、元禄4年の10月末までの25箇月ほど上方に滞在するが、元禄3年に湖南の国分山の幻住菴に3箇月ほど、元禄4年に半月ほど洛西の嵯峨に庵住生活を送り、10月末に江戸へ戻ってくる。翌年の元禄5年（1692）の5月中旬に仮寓していた借家から第三次芭蕉庵に移り、庵住生活をする事となる。5年、6年と芭蕉庵で過ごし、7年の5月上旬に芭蕉庵を出立して、10月に大坂で客死する。

以上に見て来たように芭蕉は旅と庵住生活を交互に繰り返す、既に故人となった和漢（日本・中国）の詩人と心の中で交歓し、旅では歌枕（和歌に詠み込まれて有名になった土地）を通して、また、庵住生活では隠逸の詩句や文章を通して、現実生活の芸術化をはかろうとし、表現しようとした。実際、芭蕉は同時代の例えば、北条団水（1663～1711）によって「俳隠逸」（『特牛』元禄3年）と見られていたし、時代は少し下がるが、上田秋成（1734～1809）によって、大平の時代に「僧俗いづれともなき人の、かく事解れて狂ひある」く（『去年の枝折』1780）時代錯誤な漂泊者として皮肉られていた。隠逸の世界は『幻住菴記』（元禄4年刊の『猿蓑』に所以）によって、旅（＝人生）の理想は『おくのほそ道』（元禄7年に素竜が清書し、跋文を記す。）によって完成されたように思われる。以下、芭蕉の核となっている旅と庵住の思想についてその深化の過程を記したい。

笠やどり

坡翁雲天の笠の下には、紅海の蓑を振、無為のちまたに雨やどりし給ふめる西行の侘笠、哀に貴シ。（中略）此笠は是艶ならず、美ならず。ひとへに山田守捨し案山子の、風に破られ雨にいためるがごとし。笠のあるじも又、風雨を待て、情尽る而已。

世にふるは更に宗祇のやどり哉

泊船堂芭蕉翁

虚無

この文章の前には、枯木群鴉図と「枯枝にからすのとまりたるや秋の暮」の発句が画賛として記され、この文章の後に、宗祇行脚図が描かれ、先に引用した「世にふるは更に宗祇のやどり哉」は行脚図の上方に記されたものであった。これは芭蕉の自画賛であり、天和元年（1681）のものとして推定されている^[1]。署名の脇に、虚無の押印がしてあり、「然るべき人の需めに応じた染筆^[2]」である。しかも、初期俳諧では、観念による言語遊戯をもっぱらとしていた為に、絵画化はよくなしうるものではなかった。俳諧も「实在可能な景象が言語」化されることで、「彩管による描写も可能にな^[3]」った訳で、この芭蕉の自画賛は俳諧表現の変化を示すものでもあった。

「坡翁雲天の笠の下には、紅海の蓑を振」までは、蘇東坡が海南島まで流された史実を踏まえての叙述であるが、「天の笠の下には」の箇所、宋時代の魏慶之撰になる漢詩の詩法や評論を収めた『詩人玉屑』の中の芭蕉のよく使う好きなフレーズ、即ち宋の詩僧、可士の「笠ハ重シ呉天の雪」が効かされている。ここで、尊敬する中国の詩人、蘇東坡に旅人とし

での自己を同一化し、「無為のちまたに雨やどりし給ふめる西行の侘笠」に続き、これまた、尊崇する日本の代表的な歌人、西行を出して、旅人としての象徴である「笠」をリフレインして、西行の『山家集』から採った^[4]であろう、そして、芭蕉を考える上でキー・ワードになっている「侘」を上につけ加えて、故人にすぎること、自己の立場を確立しようとしている。

蘇東坡の旅人の象徴としての「笠」のイメージは外出中に雨に遭い、「笠」と木履を借りたエピソードが『聯珠詩格』七に載っており、それから着想されたものであることが指摘されており^[5]、その通りであろう。西行の和歌には「笠」は出て来ないが、『詩人玉屑』の中で禅僧が、北の呉の国に仏道修業の為に、「笠」に雪をいただきながら、鉢を持って旅するイメージを蘇東坡と西行におおいかぶせながら、これらの俳文は出来たのであろう。

「世にふるは更に宗祇のやどり哉」は、更にこれを、即ち「笠」を連歌師の宗祇（1421～1502）に結び付けて生まれたものと考えられる。この「笠やどり」の俳文は、もともと、「世にふるは更に時雨のやどり哉」の宗祇の発句と、『詩人玉屑』の「笠ハ重シ呉天の雪」の詩句が響きあって、合体した所から生まれたと思われる。芭蕉の「笠やどり」の自画、宗祇行脚図をみると、「笠」はかぶっておらず、右手に持っている。

芭蕉の「世にふるは更に宗祇のやどり哉」は、諸家によって指摘されるように^[6]「時雨が抜かれていて「談林」の手法になっている。この発句は、宗祇の「時雨」を「宗祇」に換えただけだが、宗祇の発句は二条院讃岐の「世に経るは苦しきものを楨の屋にやすくも過ぐる初時雨かな」の著名な和歌を踏まえたものだ。讃岐の和歌は、現実の生き難さを「時雨」と対比して、「時雨」をうらやんだものである。それに対して、宗祇の発句の「時雨」は、人生の無常、そのものを表現している。芭蕉の発句は表面的には、「時雨」に人生の無常を重ね合わせて、宗祇に同調しているように解釈されるかもしれないが^[7]、それは違うのではなかろうか。今まで、述べて来た所から推測すると、「宗祇のやどり」は、「宗祇」の「笠」（＝旅人）の「やどり」なのではなかろうか。白石悌三氏によれば、芭蕉の思いえがく宗祇像は、『扶桑隱逸伝』の「漂泊詩人の面影であった」^[8]という。宗祇自身は好き好んで旅をしたわけではない。戦国乱世にあって、生活の糧を得るために止むなく旅をしたのである。従って、「世にふるは」の芭蕉の発句は、「笠」の下で旅に明けくれた、蘇東坡、西行との前文との連関で解釈するなら、宗祇もその系譜上に位置させて、「人生を送るとは、つまるところ、漂泊詩人の宗祇のように過ごすことであるよなあ。」の意に解され、故人の系譜に芭蕉自身が連ることへの決意を表明したものである。

先ほど、この「笠やどり」の宗祇行脚図について述べたが、構図としては一人の墨染めの衣をまとった僧侶が右手に笠、左手に杖をたずさえて、右方向の松を眺めながら、旅をしている体である。実はこれとは旅人の位置が逆の方向をしめしている自画賛が存在するのである。それは、後に論ずるが「旅人とわが名よばれむはつしぐれ」の謡曲の「梅が枝」の一節の胡麻点の付された発句自画賛である。この自画賛の僧侶は「笠やどり」と逆の方向、即ち、左の方向に向いているのである。笠は背負われて、右手で杖をついている。画中の人物

はもちろん芭蕉である。「笠やどり」の僧侶とここに描かれた僧侶は顔等、全く同一である。従って、「笠やどり」は宗祇行脚図ではなく、芭蕉行脚図ではなかったか。

「笠やどり」の俳文は、縮少、増幅され、「笠はり」「笠の記」「洪笠の銘」とその度ごとに改題されて行くことになる。「笠はり」では『詩人玉屑』の「笠ハ呉天の雪」は「坡翁」（蘇東坡）と「老杜」（杜甫）とに分解され、「坡翁雲天の笠を傾、老杜は呉天の雪を戴く。」という文に変換される。また、「世にふるは」が「世にふるも」に換えられ、この形に落ち着くこととなる。井上敏幸氏は「は」から「も」への助詞の変換を、「笠はり」をする自分自身の姿を客観化することで獲得された表現⁹¹ だとしたが違うだろう。「は」はいわゆる提題の「は」で、いくつかの中から一つを抽出するもので、井上氏も言う観念性の強いものとなる。それに対して、「も」は他にも同様のことがあることが前提とされ、「さらに宗祇のやどりかな」の詠嘆の結びを深く、自己自身の中で納得し、了解する表現となっているであろう。「笠やどり」から「笠はり」へと深化して、このように落ち着いたのである。

「旅人」と言う言葉は、「旅人と我名よばれん初しぐれ」（貞享4年）が初出であり、「旅」という言葉もそれ以降、出てくるのは、「笠」と「旅人」が同義語であった為、芭蕉に思い付かれなかったのであろう。

「世にふるは」の発句は当時、著名な句であつたらしく、俳諧師の逸話を多く集めた、『西鶴名残の友』（元禄12年刊）にも「江戸の桃青」（芭蕉）の逸話として出てくる。この句は、やがて芭蕉グループに、『詩人玉屑』の中の「雪」とともに「時雨」「笠」がセットになって、しかも芭蕉自身に旅人としての和漢の詩人の面影が覆いかぶされて、共有されて行くこととなるのである。

貞享元年の8月末に芭蕉は『野ざらし紀行』の旅で伊勢に到着するが、「笠やどり」の上記の言葉群は伊勢の連衆には浸透していなかった。

この年の11月、桑名から海上熱田に至って、熱田の連衆の首領である桐葉亭で歌仙（36句）のうち、表6句をまいているが、「此海に草鞋拾ひ笠しぐれ はせを」と発句を詠んで自己の俳諧のスタイルを連衆に必死に宣伝するに止まっている。

「世にふるは更に宗祇のやどりかな」の芭蕉を決定させたのは同月、名古屋の荷兮のグループと交友した、『冬の日』（貞享元年成立）五歌仙であった。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉 芭蕉
たそやとばしる笠の山茶花 野水

「狂句こがらし」の発句で芭蕉は自分を藪医者で様々な失敗を繰り返し、最後に狂歌を詠む、仮名草子『竹斎』（元和9年、1623ごろ）の主人公になぞらえて自分自身を卑下したが、これが名古屋の連衆への挨拶となって連衆をなごませたのは竹斎が名古屋で「天下一やぶくすし竹斎」の看板をかかげて藪医者ぶりを発揮した出来事がメッセージとして伝わったからである。

野水の脇は、すでに「笠やどり」の芭蕉のイメージが了解されていて、「笠」の上に風流な山茶花が散りかかっている姿を付け加えて、芭蕉に対して共感の意を表明したのである。この「こがらし」の歌仙の二の折の表の4句目と5句目とに、

しばし宗祇の名を付し水 杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨 荷兮

があり、また「つゝみかねての」の巻の二の折の7句目に「雪の狂呉の國の笠めづらしき荷兮」があり、『冬の日』の五歌仙の最後の「霜月」の巻には「山茶花匂ふ笠のこがらしうりつ」があり、野水の脇と対句する形で閉じられている。荷兮の付句は「宗祇」から、「笠」と「時雨」を呼び起こしたのであり、「無理にもぬるゝ」に「狂」性が表現されており、『詩人玉屑』の可士の「笠重呉天雪」を「雪の狂」呉の「笠めづらしき」の、降る雪に浮かれあるく人が呉の国にいると曲解した表現につながっている。

『冬の日』五歌仙の最後の巻の最後の句（挙句）である「山茶花匂ふ笠のこがらし」は、前句の重五の「秀句の聖」を芭蕉とみて、『冬の日』の巻頭の歌仙で竹斎に自己を見立てて卑下した芭蕉を「笠」に「山茶花」がちりかかる風流な旅人とみて、巻頭の発句と脇句に照応して、名古屋連衆に「秀句の聖」として仰ぎ見られる存在に芭蕉がなったことを象徴する有終の句となったのである。

そして、その年の翌月の12月、熱田から美濃へと向かった時の饞別吟と推定される^[10] 桐葉の発句、「檜笠雪をいのちの舎り哉」で、11月の初句には受け入れなかった芭蕉の風狂を、「笠」と「雪」と「舎り」の三つの単語を「笠やどり」の言葉の網目の中から抜き出し、雪中を旅するであろう芭蕉の旅の無事を祈念することで熱田連衆の代表としての桐葉が挨拶し、芭蕉への帰依を言外に示したのである。

桐葉の発句から、この時、芭蕉が「檜笠」をかぶっていたことがわかるのだが、芭蕉自身、ファッションの側面でも中国の詩人に自己を擬していたのではないかと推測されるのである。前に、天和2年の八百屋お七の火事で天和3年に甲州谷村に流寓したことを記したが、画は残っていないが、芭蕉の賛が残っている「馬ほくへ我をゑに見る夏野哉」という発句がある。これには弟子の杉風が描いた芭蕉翁馬上吟図が残され、「われを絵に見む夏野かな」の形で出ている。そしてその画は、「中世の禅林で愛好された杜甫騎驢図・杜牧騎驢図・蘇東坡騎驢図」を粉本にした、「中国の詩人・文人」^[11]になぞらえたように描かれているのである。『野ざらし紀行』の旅はその翌年の旅だが、小夜の中山で詠んだ、「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」の発句は、杜牧の「早行」の五言律詩の「残夢」と「月遠」のキー・ワードを裁ち入れて、自己を「杜牧騎驢図」の杜牧に仕立てあげて、イメージし詠んでいるのである。従って、芭蕉のかぶっていた桐葉の「檜笠」は、貞享4年の『笈の小文』の旅の中で、自己を廻国僧に擬して、

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せふぞ檜の木笠

よし野にて我も見せふぞ檜の木笠 万菊丸

の「檜笠」と異なって帽子の広い中国文人の「騎驢図」の「笠」だったのではないかと思われるのである。

ところで、名古屋の荷兮、熱田の桐葉に紹介の労を取り、「狂句こがらしの身は」で始まる名古屋での芭蕉の風狂ポーズのお膳立てをし、演出をしたのは、尾形仇氏^[12]によって、同じ季吟門下で、大垣の回船問屋の木因であることが明らかにされた。木因の稿本『桜下文集』（成立年次不明）に、

佗人二人あり。奴姿にて狂句を商ふ。（中略）紙衣かいどりて、道行を諷ふ。

歌物狂二人こがらし姿かな 木因

『冬の日』の歌仙の巻頭の「狂句こがらし」の芭蕉の発句は、木因の「歌」を詞書きの「狂句」に換え、「二人」を一人に絞り、「姿」を「竹斎」に換骨奪胎したものである。尾形仇氏によれば^[13]、木因の「狂句を商ふ」は、其角が編纂した『みなしぐり』（天和3年刊）中の芭蕉と其角との両吟歌仙、「詩商人年を貪ル酒債かな」「詩商人花を貪ル酒債かな」から採ったものだという。即ち、風雅な享楽生活を満喫して酒代をかせぐには、「詩」（漢詩）を売りさばくに、如くはないという、いささか自嘲気味な意の句だった。それに木因が共鳴して、熱田と名古屋に芭蕉が入る前に、伊勢と桑名であらかじめ示威運動をして、これまでの蕉風に「狂」を付け加えて、すっかりお膳立てをして、前々に尾張連衆に芭蕉をアピール済みだったのである。更に言えば、延宝末から天和の蕉風をリードし演出したのは弟子の其角であり、芭蕉の「狂句ころがし」の発句中の「竹斎に似たる哉」の「竹斎」は、『桃青門弟独吟廿歌仙』（延宝8年）の其角独吟歌仙の発句、「月花ヲ医ス閑素幽栖の野巫の子あり」の「野巫の子」（竹斎）から恐らく採られたものであった。膳所藩医を父に持ちながら、佗び住居の地で「月花」を相手に医療行為をする自分を戯画化して、「野巫」に「竹斎」を重ね合せているのである。名古屋での「狂句こがらし」以降の歌仙は、其角、木因の演出に芭蕉が乗った形で成立した世界だったのである。

「笠はり」で和漢の詩人に「旅人」としての自己を観念的なぞらえた芭蕉は、『野ざらし紀行』の旅で、中国の文人・詩人に自己をより強く同一化して行ったように思われる。名古屋に入って、そこに「狂」性が加わったとまとめられよう。それでは、次の『笈の小文』の旅では、「旅人」像はどのように変化して行ったのだろうか。

ところで、『笈の小文』は、問題のある紀行文である。『笈の小文』は貞享4年（1687）の冬から5年の夏にかけての芭蕉の紀行作品だが、①近江蕉門の乙州が、芭蕉没後、15年経過しての出版した本であること、②「百骸九竅の中に物有。」で始まる冒頭の風雅論、「抑、日

記といふものは」で始まる紀行論と「跪はやぶれて西行にひとしく」で始まる紀行論が前後の脈絡なしの導入であること、③芭蕉の草稿の断簡はあるが自筆の草稿本のないこと等の理由から、宮本三郎氏は門人の乙州が芭蕉の断簡類を集めて紀行作品の体裁にまとめ上げて出版した偽作^[14]であると結論した。

一方、『笈の小文』で芭蕉が自己の履歴を書いて、「つゝに無能無芸にして、只此一筋に繋る。」云々の箇所が、①やがて『猿蓑』に所収される「幻住菴記」の草稿本で元禄7年7月の下旬に書かれた（「夷則下」と書）「幻住菴記」の箇所とほぼ同一であること、②この稿本に先立つと考えられる断簡（阿刀家に所蔵されていたが現在は京都国立博物館蔵）が『笈の小文』の「跪はやぶれ」云々の文章と酷似していること、③芭蕉は幻住菴に4月6日に入居するが、弟子の杜国の訃報（3月20日没）を、伊賀の門人の土芳の『庵日記』から、4月の初旬に知ったこと等から、「幻住菴記」の作成と同時に平行する形で、元禄3、4年頃、杜国への「鎮魂の書」として『笈の小文』が発企され、芭蕉によって書かれたとする尾形竹氏の説^[15]がある。

そこで私は宮本氏の説を支持するとともに、明らかに元禄3年の夏以降と推定される、先ほどの、風雅論と紀行論の二つ、それに「『猿蓑』成立の頃かと推定される」^[16]須磨の発句、七句、即ち「月はあれど」から「はかなき夢を夏の月」まで除いた形で以下の論考を考えた。即ち、どのように考えてみても紀行文としての内容の不統一感が払拭できない。元禄3、4年であると「おくのほそ道」の旅の直後なので、「おくのほそ道」の執筆も考えなければならぬし、それに、杜国への「鎮魂の書」なら尾形氏自身も疑問を呈している『猿蓑』に入集している杜国の発句が入っていないなどの矛盾が一向に解消されないのである。『笈の小文』は宮本説の観点から、今後の研究を進めて行かなければならない。

『笈の小文』は、①芭蕉が亡父の33回忌の為の帰郷、②『野ざらし紀行』の旅で著名になったことによる各地の門人による招聘、③かつて仕えた藤堂家の遺子の良長の招待などによって成立した紀行文である。前半は故郷、伊賀での、絶唱、「旧里や臍の緒に泣としの暮」がハイライトである。後半は尾張藩の財政危機のために、藩命で空米売買（米の先物取引）をしたにもかかわらず、幕府の禁令に触れ、罪を一人でかぶって所払い（追放刑）にあった弟子の杜国（名前を芭蕉との男色関係を匂わせる万菊丸という幼児名に変えられる。）との吉野行脚を始めとする畿内の名所（歌枕）巡礼の旅の二部によって構成されている。

ところで、「笠やどり」の中の句文の言葉群がどのように同義的な関係を結び、変化して行くのかがこの論文の主旨であった。そこでもう一度、『笈の小文』という作品を『野ざらし紀行』の次の時間軸に置かれた作品としてその地点へ帰って見て以下、検討してみようと思う。

旅人と我が名よばれん初霽　芭蕉
亦さざん花を宿々ににして　由之

貞享4年10月11日の其角亭での送別で十一吟世吉（44句）の発句と脇である。芭蕉は初めて、謡曲語彙の「旅人」と、歌語の「初霽」を使った。歌語の「初霽」を使ったのは芭蕉が最初で、もちろん二条院讃岐を意識してのことである。「よばれん」の「ん」は意志を示し、その撥音便の響きに芭蕉の弾む心が表現されている。由之の脇は、『冬の日』の巻頭の「狂句こがらしの」を受けて、付けられた野水の脇に応じる形で、「亦さざん花を宿々にして風狂の旅を続けられるのでしょうかね」位の意に解される。「笠やどり」では明示されなかった「旅人」を『笈の小文』のこの句では、はっきりと前面に押し出し、「宗祇」の「時雨」も、時間的に限定して、「初」めての「時雨」にして、浮き立つ気持を時間を限定することで表現することが出来た。

「旅人」は「旅衣」と並んで、謡曲語彙である。「旅衣」は、諸国一見の僧がワキの場合、ワキツレが付く場合は、「次第」「名ノリ」の小段の後、ワキツレなしの一人の場合は「名ノリ」の、それぞれの直後の「道行」の小段の中で謡われる語彙である。そして、「旅人」は、そのあとの人間の姿をした化身体との「問答」の小段でたびたび使われる謡曲、特有の語彙である。『梅枝』の「はやくなたへといふ露のむぐらの宿はうれたくとも袖かたしきて御とまりあれやたび人」の「下歌」の小段をまるごと引用した『笈の小文』旅中の染筆の前書の付いた「たび人とわが名よばれむはつしぐれ」の発句画讃と懐紙が二つあるので、「旅人と」の其角亭での芭蕉の発句は、芭蕉自身が自己を謡曲の諸国一見の僧に擬したことは明白なのである。

『梅枝』の下歌に出てくる「たび人」は摂津の住吉に着いたワキとワキツレが里の女に一夜の宿泊を所望した所、「むさくるしい所ですけどお泊り下さい旅人」と里の女が答えた箇所で使用された。その「たび人」を使って、「旅人と」の「旅人」を謡曲語彙であることを芭蕉がわざわざ自解したのは何故か。それは回りの連衆たちの無理解による。

『笈の小文』の旅で12月1日に名古屋から熱田へ戻るが、その桐葉亭での半歌仙で、

旅人と我見はやさん笠の雪	如行子
盃寒く諷ひ候へ	はせを
有明の鉢の木を刈初て	桐葉

と発句、脇、第三と続けられたが、如行子は「旅人」の謡曲語彙を使って芭蕉の「旅人と」の発句に唱和するような形で詠んだように見受けられるが、下五が「笠の雪」と詠むことで、目の前の芭蕉を『野ざらし紀行』以前の古い風狂人の芭蕉と見てしまった。「笠の雪」を冠った芭蕉は中国の文人・詩人のイメージではなかったか。「盃寒く諷ひ候へ」は、「誤解しないで下さい。謡曲の中のワキ僧に自分を見て下さいよ」という芭蕉の言い返しのように聞こえる。それを察してか、第三の桐葉の付けは、「旅人」を僧に変装した北条時頼に見立てて、何もないので佐野常世、よろしく鉢の木を切って、暖の馳走としましよと謡曲の世界で応じた。桐葉は反応したが、他の連衆が無理解だった為か、『笈の小文』での三河、尾

張の蕉門連衆の作品を収めた『如行子』（成立年月、未詳）には「はせを心地不快ニして是にてやみぬ」と半歌仙で終了してしまったことを記している。しかしながら、半歌仙で終了したのは病気の為とばかりとは言えないだろう。

今栄蔵氏によれば、「『謡をたゞちに取たる』」「斬新な風躰として俳壇の人気をさらった」のは「万治頃であった」。そして、そのことが「遂に『謡の本を至極の歌書とする』風潮を、寛文初年頃」「まき起こしていた」^[17] というのである。即ち、談林の総帥、宗因が始めてから、寛文年間に謡曲の裁ち入れは大流行を見たのである。それが、やがて、マンネリズムに落ち込んだことは、乾裕幸氏の分析^[18] に詳しい。

芭蕉自身も、少し遅れるが延宝6年の発句、「あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁」の上五で謡曲を裁ち入れている。これは、謡曲『芦刈』の、ツレの従者が今や富貴となったワキツレの女とともに零落した元夫を訪ねる場面である。この場の狂言アイとの「問答」で、前はこの場所に住んでいたが今はその夫が行方不明になったとの返事、「ああ困った事だ」を芭蕉は上五に裁ち入れたのである。即ち「あら何ともなや」で謡曲のこの場面を想像させ、それを言い掛けのテクニクを使って、「河豚」を食べた翌日の光景の場面を下五に言葉として続け、「あら何ともなや」を日常語に取り扱ったおかしさを演出しているのである。初期俳諧の談林の手法では、こうした謡曲の場面を裁ち入れたことを連衆に明確にし、それはずした時に謡曲のフレーズというものを使われるものであった。

ところで芭蕉が貞享4年のこの時期に謡曲を使ったのは、それとはわけがちがう。芭蕉の「旅人」の謡曲語彙の使用は、自己をワキ僧に仕立て上げる為だった。世阿弥が完成した複式夢幻能の前場で、ワキ僧は、様々な場所で事件に出会う。その場所とは、『伊勢物語』や『平家物語』という典拠（本説）に基づかれた場所であった。『笈の小文』で、芭蕉が須磨、明石まで足を伸ばしたのは、『平家物語』と無関係ではない。貞享期の芭蕉は「あら何ともなや」の発句のようにパロディー化する為ではなく、謡曲語彙を心として受け取った。高橋庄次氏^[19] が『笈の小文』の最後の箇所、「其代のみだれ其時のさはぎ（中略）千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁おほく侍るぞや。」が「夢幻能の修羅物」のキリと、韻数律は七五調が守られていないので違うが「同じ結び方になっている」との指摘をしたことは、須磨、明石の条まで書いて来たことと無関係ではない。

『笈の小文』での歌枕巡礼や謡曲に関する土地での故人との交歓は後に『おくのほそ道』の旅でもう一度、実践されることになる。

『野ざらし紀行』の中国の文人・詩人イメージから、『笈の小文』の諸国一見のワキ僧への芭蕉のイメージ・チェンジにともなって発句も、破調な文体がなくなり、全体的に見ると風狂性が消え、穏やかで温雅な風調に変わって行った。このキッカケとなったのは、貞享元年の暮れ、『野ざらし紀行』の旅で伊賀の故郷に再び戻って越年し、その年の2月に奈良で芭蕉が薪猿楽を見たことによるのではないか。この事跡は伊賀の門人で伊賀の芭蕉の行動を詳密に記した、土芳の『芭蕉翁全伝』（日人編、1804年、自筆写）によって知られ、確証が高い。

薪猿楽は、奈良興福寺の修二会に付随した神事である。2月中旬に春日若宮の社頭で能楽

四座によって演じられるものである。能楽四座のうち、観世は寛文3年以降、江戸移住とともに参勤を免除されていたので^[20]、金春、金剛、宝生の三座のうち、芭蕉が見たのは、このうちの二座であった。

ところで四座一流の能楽師は各藩に抱えられていたので、実際に庶民が能に接するのは勧進能と薪猿楽（能）ぐらいで、この演能を直接、見たことは芭蕉にとって大きな衝撃だったにちがいない。芭蕉が『野ざらし紀行』の旅を終えて、貞享2年の4月末に芭蕉庵に戻って、この謡曲の掘り起こしをしなかったのは、庵住思想にさまたげられてのことだった。しかし、このことについては後で述べる。

ところで、風狂の「旅人」としての芭蕉のイメージは、尾張や美濃の連衆の間で消えることはなかった。この風狂性へ、いつまでも固執して行ったことが後に芭蕉から名古屋連衆が離反して行くことになる最大の要因となる。

霰かとまたほどかれし笠やどり 如行

貞享4年の12月3日、熱田より名古屋に戻っての書林風月堂主人の夕道邸での表六句の発句である。ところで「笠やどり」とは芭蕉であり、芭蕉にとっての重要なタームであった。この発句は霰のために草鞋の紐をほどいて泊まって下さることは有難いという芭蕉への歓待の意を込めた挨拶の句である。

12月5日、荷兮宅で、岐阜の落梧が、芭蕉を自宅に招こうとしてという前書きが『如行子』に記されていて、次の落梧の発句に

凧のさむさかさねる稲葉山 落梧

「凧の」は『冬の日』の「狂句こがらし」を当然、受けての上五である。稲葉山（金華山）は落梧の自宅の所在地で、「さむさかさねる」は「寒い所ですが、幾晩でも御逗留下さい」との芭蕉への誘いの文句である。『冬の日』の五歌仙が、あまりにも鮮烈であったために、この「凧の」の上五にも響いているのである。

翌、貞享5年（9月30日、改元して元禄元年）の2月、伊勢参宮の途次か帰途の際に、斯波一有の妻園女に招かれての発句、脇。

時雨てや花まで残る檜木笠 その女 宿なき蝶をとむる若草 翁

芭蕉がその女に会ったのは、これが最初だが、その女の発句は、『冬の日』の「狂句こがらしの」の発句と野水の脇、「たそやとばしるかさの山茶花」を一つにまとめて、『冬の日』の芭蕉を目のあたりにしての感激の思いを句に託したものである。芭蕉の脇は、宿なしの自

分を、花の蜜を探し求めて飛び回る蝶になぞらえ、若草（その女）に目が止まったという意で、その女の若々しい美しさを比喩の形で挨拶し返したものである。

「時雨」「花」「檜木笠」の三点セットの『冬の日』のイメージで、その女が自分に挨拶したこと、芭蕉はいささか食傷気味だったろう。この「旅人」としての「笠」や「時雨」は『猿蓑』（元禄4年7月刊）でどのように変わるか以下、述べることにしよう。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也 芭蕉

『猿蓑』の巻頭句で、撰集の題名がここから採られたのは周知の通りである。この後、「時雨」の季の詞の入った門弟の発句が12句続くこととなる。白石悌三氏によれば、『猿蓑』の「部立は冬夏秋春という異例の配列をと」り、「時雨の群作に典型的にみられる『さび』と高次の文芸性が、総じて冬の部を支配し、対照的に『かるみ』と挨拶性が春の部に著しい。」^[21]と言われるが、それは「時雨」の句を冒頭に12句、置くことで京俳壇に蕉風をまずアピールしたかったからである。

冒頭の「初しぐれ」の発句は、『笈の小文』の「旅人と」の発句も同様だが、宗祇の発句や、「笠やどり」の「時雨」を抜いたが、背後に「時雨」が隠されている「世にふるは」の発句のように無常感の響きはこの句には込められていない。「時雨」の中を旅をした過去の詩人の系譜につらなることによる喜びがまず「初しぐれ」のこの句の最初の上五に表現されている。前にも述べたが、「時雨」の前に「初」の接頭辞を冠せて、時間を限定することで、「現に眼前に降った『しぐれ』であることが強調される。」^[22]のである。次の「猿も」だが、この「も」の措辞から、その背後に「自分も」という内声が隠されている。それに続く「小蓑」の「小」だが、上野洋三氏の言うように「単に相対的な大小を示すのではなく、愛おしさをこめた愛称の接頭辞」で、『小蓑』だ、と表現することによって、間接的に『猿』への愛おしさ、慈しみを表わすことにな^[23]っていく。下五の「ほしげなり」で推定の助動詞「なり」を置いて、『旅人とわが名呼ばれ』のように「主観性を強くうち出して表現したところを」「内に抑え」^[24]、外から描写する形でこの発句は納められている。しかも、『野ざらし紀行』の富士川の場面で捨子に会って、「猿を聞く人捨子に秋の風はいかに」の芭蕉の発句のように漢詩文の伝統にのっとり「哀猿断腸」の猿のイメージを、転換して、芭蕉自身が仮託された「初時雨」に浮かれ興ずる猿を演出したのである。

ところで、これまでの文脈で言えば、「蓑」は「笠」が変換したものであろう。「笠」とは何度も言うように「旅人」の象徴であった。何故、「旅人」の象徴としての「蓑」に換わったのかというと、『おくのほそ道』の途次、門人となった金沢の北枝に「蓑」を送られたからである。芭蕉に「旅人」の象徴としての「蓑」が新たに加わり、「猿」の雨具として「蓑」がふさわしかったので「蓑」をあてはめ、「初時雨」に興ずるものを、和漢の詩人と漢詩の伝統から解放して、この句が誕生したのである。

ところで、『猿蓑』の撰集の中で最多の句を採用されたのは「写生の演出家」^[25]といわれ

る京の門人の凡兆（41句）であった。

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり 凡兆

近世の俳諧の本意（雅語のイメージ）を季吟の著した『山の井』（1647成立）の季寄で調べてみると、「しぐれは、空さだめなく、はるゝと見ればぐれりと曇り、降ると思へばさゝらげもあらぬ気色、足ばやに通りゆくさま」と書かれており、このイメージは元禄期の俳諧の第三世代にあたる芭蕉の世代にも共有されていたイメージと見てよいであろう。

『芭蕉七部集』の評釈者は、「山家の内は冷え冷えとして薄暗く、軒下に積んだ黒木に時雨の降りかかるのを明り窓から眺めている。」^[26]として、この句を窓の内から外の黒木を眺めていると解釈しているがこれは間違いだろう。近代のリアリズムの観点からすれば、「窓あかり」の見える刻限に洛北大原名産の薪、「黒木」は見えないし、「黒木」の見える刻限に「窓あかり」の火の灯をつける必要もない。これはおそらく実景ではないだろう。晴れと曇りの中間のあわい、「時雨」の「本意」のかもしれない出す天候をバックにして、黒光りのする薪をそれを売る商家の軒下の上方に、「窓あかり」を取り合わせて「さび」の寂寥感の情趣を構成し表現しようと意図したものである。

広沢やひとり時雨るゝ沼太郎 史邦

恐らくこれも実景でない。『類船集』（1676）の「広沢」の付合語として「住人もなき」が記されており、「広沢」から来る広い池のイメージと寂しい景を上五にまず持って来て、「沼太郎」（ヒシクイで方言名。）を「ひとり」と擬人的にとらえ、「時雨」にじっと濡れているヒシクイの景は、「猿」に「蓑」を着せた芭蕉の冒頭句と対になっている。ここでは史邦自身の寂寥感が「沼太郎」に投影されており、「初時雨」に興ずる芭蕉の句とは真反対の情趣をかもし出している。これも、「時雨」を背景におき、広大な「広沢」の池と小動物の「沼太郎」を取り合わすことで、「沼太郎」（作者）の孤独感を浮かび上がらせている。

新田に稗殻煙るしぐれ哉 膳所昌房

凡兆の句は町場の景であろうが、これは田園の景である。「煙るしぐれ」の中に新田での収穫後の稗殻を置いて、田園の蕭条たる寂寥感を構成した。さて、今までの引用句のように対象を一つにフォーカスして行く句もあるが、構図を大きくとらえた句も採用されているので次にあげる。

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋 僧丈艸

「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」の広重の浮世絵に言及される^[27]、丈艸の句だが上空から眺めた視点で構成されており、これも実景ではなく構成した句である。こうした大きな構図の句は、この他に「時雨きや並びかねたる鯨ぶね 千那」や「いそがしや沖の時雨の真帆片帆 去来」などがある。それから分かっただけで名所や歌枕は「三井寺、豎田、勢田、広沢、竹田」の5地点に及んでおり、この集が最初に「時雨」の季の詞を置いて、「さび」を統一テーマにして、様々な取り合わせを構成して、「景気」（景色）の句を並べることで、連歌もどきの「景気」の句が流行し、それをリードしている貞門系の京俳壇に自己主張するための撰集だったことが明白になった。

ところで、これまでの論述にもどると、この『猿蓑』で、「旅」の象徴としての「時雨」は、完全に「旅」から切り離されることになったのである。それは、芭蕉のキャッチコピーとも言うべき「時雨」を使って、「時雨」の季の詞に統一情趣（さび）を込めて、様々な「時雨」の景を構成することで蕉門の存在を認識させる必要があつて、「時雨」は旅から離れて景の中の構成要素となってしまったからである。

『猿蓑』で旅が「時雨」から切り離されるとともに、「時雨」に込められた情趣を解する者は、蕉門の連衆だけでなく、「猿」や「沼太郎」と言った小動物にも拡大された。では「時雨」から切り離されて、芭蕉にとっての「旅人」はどのように変転して行くのか。そのことを『おくのほそ道』（元禄7年夏成立）に以下、探って行きたい。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。」の冒頭部は周知のように「古文真宝後集卷之三」「序類」の「春夜宴桃李園序 李太白」の「夫レ天地ハ者万物ノ之逆旅ナリ、光陰ハ百代之過客ナリ」（寛永版）を典拠としている。李白の場合、「光陰」は時間の比喩として使われ、年月はという意になり、それが擬人法的に「過客」（旅人）と表現されている。そして、その「光陰」を迎える場所（＝逆旅）が「万物」だと言うのである。

芭蕉の場合、「夫天地者万物逆旅」の最初の部分をまずカットして、「光陰」を「月日」と「行かふ年」に二分割して、「過客」と「旅人」と同義語にある言葉（漢語と和語）にリフレインして表現した。従って、「月日」は「つきひ」と今まで読まれて来たが、「ゲツジツ」と漢音で読んだ可能性も否定しがたい。また、「光陰」は抽象的な時間を具体的に表現した比喩だが、「光陰」（日光と日影）の具象性が、芭蕉の「月日」に反映して、天体の「月」と「日」（太陽）の意も掛けられている可能性がある^[28]。

李白の場合、この直後、「浮生若夢」と続き、だから、「今宵の宴席を楽しもうではないか」と続くのだが、ところが以下の箇所を芭蕉はすべてカットする。ところで、冒頭の「逆旅」は「旅を栖とす。」の箇所に生かされ、船頭や馬子を「旅人」の具体例としてあげ、芭蕉の尊崇する和漢の詩人（＝「古人」）も多くは旅中に死んでいると結ぶ。ここで思い浮か

べられている「古人」とはこれまで論じて来た所から言えば、「蘇東坡」「杜甫」「西行」「宗祇」のこの四人であろう。

ここで大事なのは、『猿蓑』によって、「時雨」や謡曲のワキ僧のイメージを洗い落とされることで「旅人」の概念が、「古人」（和漢の詩人）だけでなく、馬子や船頭まで拡大されたと言うことである。しかも、「光陰者百代之過客」という裏付けをしつつ、「百代の過客」（永遠の旅人）を実践しようという確固たる決意が、『おくのほそ道』の序文で述べられているのである。

それは序章と終章の発句が、次のように対応していることからもうかがえる。

行春や鳥啼魚の目ハ泪
 蛤のふたみに別行秋ぞ

「行春」は冒頭の次の旅立ちの段の発句で「行春」の「本意」、「惜春の情」に鳥も啼泣し、魚の目には涙が見えるの意。これは、詩題（漢詩）の「留別」（旅に出る人が残る人に別れを告げる）を「行春」という季の詞を使って表現したもので、「行春」は季題を表しているだけでなく、これから自分（芭蕉）が旅立って行く春の季節という意味が掛けられている。「鳥啼」は恐らく張継の著名な七言絶句、「月落鳥啼霜满天」（「楓橋夜泊」）から採ったもので、「鳥啼」「魚の」「泪」が句中対のような形で構成された。「鳥啼」「魚の」「泪」は芭蕉の周囲の人達が暗示され、談林期の見立ての手法の背後に、延宝期の漢詩文調の「観想」が込められた発句となった。

所で、この句は、『おくのほそ道』の芭蕉の旅中吟を集めた『曾良書留』にも記載がないし、この句が掲載されている『鳥の道』（元禄10年刊）や、『泊船集』（元禄11年刊）は『おくのほそ道』から採用された^[29]と考えられている。また、旅立ちの段にこの句が挿入されたのは、「紀行文執筆の際、巻末の『ふたみに別れ行く秋ぞ』の句との照応を考慮して」^[30]のことだと考えられているが、その通りだろう。

「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」の発句は、終着地「大垣」の段の句で、『おくのほそ道』はこの句で結ばれることになる。「蛤のふたみ」で「盃と身」の語句に続け、次にそれが言い掛けの形で「二見へ別れ行」、即ち、伊勢地方の二見ヶ浦へ、伊勢の遷宮式を拝みに皆さんと別れて行くに続くことになる。最後の「行秋ぞ」の下五は、上句を受けて、この「秋」に自分（芭蕉）は行くのだと「秋」の直後に切れ字を持って来て、「秋」を強調して表面上は終わるような形になっている。しかし、「行く秋」は、去り行く秋を惜しむ意を持った「本意」の季の詞で、全体が晩秋の寂しさに包まれている。更に、「蛤のふたみ」の「ふたみ」が、「盃」と「身」を意味し、「ふたみに別れ」に「盃と身」が切り離されるイメージがこの句におおいかぶさっている。旅立ちの段の「行春や」同様、見送りの人々に対する挨拶ともなった留別吟である。

尾形仇氏の言うように『おくのほそ道』は「明らかに芭蕉の構成上の計算がはたらい

た」^[31]と言わなければならないだろう。この二句の発句の照応で大事なのは、『おくのほそ道』の序文で芭蕉が記した、「月日は百代の过客」、即ち「永遠の旅人」の理念を旅立ちの段の発句、「旅人」を「行春」で旅に出立させ、終着の大垣の段の「行秋」で、また、新しい旅へ始める所で終わらせることで、表現の上で理念を実現していることである。

和漢の詩人に自己をなぞらえて、始まった旅は、「永遠の旅人」という理念を発見して、完結することになる。芭蕉にとって日常生活を芸術化することは一つには、故人との対話を通して自己を「永遠の旅人」にすることだったとすることが出来るだろう。

ところで、この「永遠の旅人」像に芭蕉が帰着することになった思想的背景に、「乞食ノ僧」への芭蕉の姿勢があると考えられる。そのことについて次に論ずる。

「乞食」という言葉が最初に出てくるのは市中日本橋を離れて、門人杉風が用意した隅田川対岸の新開地深川に居を移した天和元年の作^[32]と推定される「櫓声波を打て」等四句入句懐紙の詞書中である。

窓含西嶺千秋雪

門泊東海万里船

泊船堂主 華桃青

我其句を識て、其心ヲ見ず。その侘をはかりて、其楽をしらず。(中略) 閑素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁とよぶ。

引用した最初の七言二句は、芭蕉が『聯珠詩格』（正保3年）の巻一から直接採ったと考えられる、杜甫の成都時代の作の、七言絶句のうちの後半の二句である。杜甫は同谷から成都に移住し、浣花溪のほとりに茅葺の庵を結んだ。浣花草堂である。この時期は杜甫がもっとも隠者生活に傾いた時期である。芭蕉は芭蕉庵を浣花草堂になぞらえ、「西嶺」を富士に、「万里船」の「泊」す、「合江亭」を深川の地に見立てつつも、杜甫の「侘」生活を「楽」しようとするが出来ないと自白している。「自乞食の翁とよぶ」という「乞食」には自嘲の意味が込められているのである。

やがて、「乞食」が「聖僧」と同義語の関係が成立することになるのだが、それはいつのことなのだろうか。

そもそも僧から乞食への移行は、僧侶が宗門に入れば、托鉢は行であるからして、容易であったし、表面的には、托鉢行も乞食の所業もなんら変わるものではない。違いは経文を唱えるか異かであろう。

この僧形の身を改めて、「乞食」のまねをして放浪した芭蕉の門人に路通がいる。綾足(1719-1774)の『芭蕉頭陀物語』（寛延4年序、頭陀は行脚の意）という芭蕉の門人のエピソードを集めた本の中には、芭蕉は『野ざらし紀行』の行脚の折、湖南で、路通に会い、「松陰にやすらふ」「いとしろき乞食の草枕涼しげに、菰はれやかにけやりて」「やれし扇に蠅をひながら、一ねぶりのしめる也」と書かれてあって、「かたへをみれば」から「一ね

ぶりたのしめる也」は芭蕉の視点で描写されている。

路通自身も、『本朝文選』（宝永3年刊）の「返店の文」で「深川の翁。行一脚のつてに。かり初の縁を結」んだことが記されている。芭蕉が強くひかれた、「乞食」＝路通に出会ったのは本当に『野ざらし紀行』の時であったのだろうか。綾足の『芭蕉翁頭陀物語』という本自体、その多くが後に読本作家になる創作エピソードである。

芭蕉は『野ざらし紀行』の旅から、戻って、貞享4年秋の年記をもつ、両3年来の発句を34句（春13・夏9・秋5・冬7）精選して、「あつめ句」（もしくは「貞享丁卯秋詠草」として自己の庵住思想を周知のように発句化した。その最後は、次のように締めくくられている。

もらふてくらひ、こふてくらひ、やをら
 かつゑもしなず、としのくれければ
 めでたき人のかずにも入む年のくれ
 月雪とのさばりけらし年の暮
 貞享丁卯秋

芭蕉庵桃青

この卷子本の最後に記された「もらふてくらひ、こふてくらひ」は「乞食」の自己の境涯を述べたものである。また、次の発句で、そうした自己を「めでたき人」と戯画化し、「のさばりけらし」（人の迷惑もかえりみず、勝手気ままに振るまって来た）と自己をとらえた立場には、「乞食」生活の自己自身に理想の姿を、この時点で芭蕉は見えていない。よって、芭蕉と路通との出会いは『野ざらし紀行』とは考えにくいのである。芭蕉が『笈の小文』の旅で西行を通して名利を捨てた増賀上人を発見し、その発見に導かれてから、やがて門人となる「乞食」僧の路通に出会ったのではないか。

『野ざらし紀行』の旅中に『笈の小文』の旅同様、吉野を訪れている。しかし、吉野の描写は、「白雲峯に重り烟雨谷を埋んで」で始まり、その景容が漢詩文の語彙でその景はとらえられている。そして、「いでや唐土の廬山とはむも、またむべならずや」と吉野を中国の「廬山」の目（イメージ）で見ているのである。この前文の詞書を持った発句は次のようであった。

ある坊に一夜をかりて、
 碇打て我にきかせよや坊が妻

この発句は、坊の妻に秋の風物詩の碇打ちを所望している句だが、『新古今集』の雅経のよく知られた歌、「み吉野の山の秋風さ夜更けて故郷寒く衣打つなり」を踏まえて、「擣衣」の「本意」の「秋の愁」の響きを芭蕉自身が単に欲求しただけの句のように解釈されてきたが、果してそれでよいのだろうか。実は、この句は「古今集」の本歌取りをした雅経の句を

飛び越えて、「擣衣」の「本意」のもととなった「閨怨」（夫が行商や戦で遠地に行って帰ってこないことを妻が嘆く）の詩題の著名な李白の代表作「子夜呉歌 四首 其三」を発句にもどいたものだったのである。

長安一片月
 万戸擣衣声
 秋風吹不尽
 総是玉関情
 何日平胡虜
 良人罷遠征

つまり、この五言古詩を知っているであろう坊の妻に、夫へのいとおしい気持ちを砧打ちにのせてすみわたる秋の夜に自分に聞かせて欲しいというわけである。そうすると、次の、吉野山中の西行上人の庵の跡へ尋ねた時の句、「露とくへ心みに浮世すゝがばや」は、その直後、自解しているように伯夷、許由の高潔の士のエピソードをもどいて、なおかつ西行上人の俳をかぶせて作った句であることがわかる。『野ざらし紀行』は全体に漢詩文がおおっているのである。だから、中国の高潔の士の文人は出て来ても「乞食」は出てこないということになる。

芭蕉が増賀上人にちなんだ発句（連句、俳文も含めて）を詠んで、初めて言及したのは『笈の小文』の伊勢山田の条であった。それには必然性がある。それは13世紀の説話集で芭蕉当時は西行撰とされていた、『撰集抄』の巻頭の「増賀上人之事」で、伊勢大神宮にこもっての夢見で「名利をすてよ」と覚った上人が、「着給ひける小袖衣、みな乞食どもにぬぎくれて」「あかはだかにて下向」したというエピソードが紹介されていたからである。

伊勢山田
 何の木の花とハしらず句哉
 裸にはまだ衣更着の嵐哉

「何の木の花とはしらず句哉」は、周知のように「何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさの涙こぼるる」（『西行法師家集』延宝2年刊）をふまえ、「花」の「句」に「かたじけなさ」を感じて着想され、西行から『撰集抄』を介して、次の「はだかには」が生まれた。『笈の小文』だけでなく、書簡・懐紙等もこの両句がセットになっているので、この連想で詠まれることは確実である。「裸には」は、裸になるにはの意で、増賀上人の俳がこの上五に効かされており、まだ、更に衣をかさねなければならないと続き、この中七が言い掛けとなって、旧暦二月、この如月の寒風は厳しい嵐であることよとこの句は解されるだろう。この句には前句からの「かたじけなさ」が増賀上人の俳に響いており、増賀上人にとってもなれ

そうもない自己の感慨もこの句には含まれている。

芭蕉は、後に元禄3年4月10日付の此筋・千川宛書簡で「五百年来昔、西行の撰集抄に多クの乞食あげられ候」と、「名利」を捨てた逸話で構成される、『撰集抄』をプラスの意味の付せられた「乞食」の逸話集として理解するようになっていた。『笈の小文』の時点では聖僧と「乞食」が互いに転換する言葉となって芭蕉の中で概念化される迄、あと一步の段階と言えるだろう。ところで、芭蕉と門人との関わりを生涯にわたって見て行くと、その時の芭蕉が求めている門人が芭蕉の視界に入って来るという特徴がある。『芭蕉翁頭陀物語』によれば、芭蕉が路通に遭遇したのは湖南松本だが、『笈の小文』の旅でも大津へ行っているの、路通自身が記した「深川の翁。行-脚のつてに。仮初の縁を結」んだのはこの時だったのでなかろうか。

芭蕉は、元禄2年頃執筆したもので、その年の『おくのほそ道』の旅への出発の決意を伝えた書簡としてよく引用されるものがある。その中で、「去年たびより魚類肴味口に佛捨一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに〔 〕し貴僧の跡もなつかしく猶ことしのたびはやつしへてこもをかぶるべき心けにて御座候」と記していた。田中善信氏^[33]によれば、「貴僧」とは増賀上人のことであり、「うたひ」とは長明の『発心集』に記されている、増賀が師の祝賀に異様な風体で現れて、「名聞こそ苦しかりけれ、かたみのみぞ樂しかり」と歌ったエピソードを指すという。この中で芭蕉は「乞食の身」と「貴僧」とを同一視し、「一鉢境界」の修業が「乞食の身」と重ね合わせてとらえられている。しかも、その後半部で、「こもをかぶるべき心がけにて御座候」と記して、物ごいに積極的に身を落そうとする覚悟と決意を記しているのである。同じ年の2月16日付、物七・宗無宛の書簡では、旅の荷物として、「鉢のこ 柱杖」の僧侶の必需品を「是二色乞食の支度」と記している。『笈の小文』では聖僧と「乞食」が入れ換え可能な概念として一步手前であった。それが、『おくのほそ道』の出立前に、増賀上人を介して、入れ換え可能な概念として成立しつつあったのである。

『おくのほそ道』の旅から帰って来ての翌年の歳旦吟で次のような発句を発表して世間を驚かせたのはよく知られる所である。

薦を着て誰人います花のはる 芭蕉

「薦を着て」の上五は「乞食」境界の人を言い、「誰人います」は、「どれほどの貴いお方がいらっしやるでしょうか」と疑問符の形にして、「花のはる」、はなやかなこの春の京都にと続いて、新春の京に菰を冠った「乞食」に聖僧を幻視した一句である。この句は、年頭に際して新春をことほぐという歳旦吟の約束事を破った為、発表当初、京俳壇に物議をかもしたらしく、この年のさきほど挙げた4月10日付の此筋・千川宛書簡では「京の者共は、こもかぶり引付の巻頭に何事にやと申候由、あさましく候」と憤慨の気持を記している。この句に関しては、この年の正月2日付、荷兮宛の書簡で、「菰を着て誰人ゐます花の春 撰集抄

の昔をおもひ出候まゝ如此申候」という確固たる典拠があって、この句を作ったという気持があった為、「京の者共」という口ぎたないのしり言葉になったのであろう。

『笈の小文』の旅中、伊勢山田で増賀上人の俳の発句を作ること、聖僧＝「乞食」のキッカケが出来、『おくのほそ道』の旅を終えた、翌年の元禄3年には、聖僧＝「乞食」の概念が成立した。延宝8年、深川に居を移した際には、「乞食の翁」の自画像を自嘲的に語っていた芭蕉だが、元禄3年には「乞食」は理想の自画像へと変わって行ったのである。『おくのほそ道』の冒頭の序文で、「旅人」を和漢の詩人たる「古人」に見るだけでなく、船頭や馬子にも見たのは、最下層と考えられた「乞食」概念の変化と無関係ではないだろう。「旅人」概念の変化、拡大と「乞食」概念の変化とは連動していたのである。次に旅とは交互の関係にあった、芭蕉の庵住について記して、この稿を閉じたい。

前に述べたように、延宝8年冬の深川退隠後の書懷を述べた『櫓声波を打て』等四句入句懐紙の中で、自己を中国名、華桃青の3字名で記し、芭蕉庵を杜甫にならって泊船堂と命名し、芭蕉庵から眺められる遠景、近景の風景を杜甫の絶句中の詩句に見立てていた。それに先立つ、延宝8年（1680）9月の跋をもつ『俳諧合』（其角自句合二十五番の『田舎之句合』と杉風自句合二十五番の『常盤屋之句合』からなり判詞は芭蕉）で嵐雪が記した『田舎之句合』の序文で、「桃翁」（芭蕉）は、「莊子」をよく理解していて、宋代に『莊子』の注を書いた林希逸も口を噤ぐほどだと記していた。そして、そのような理解のもとにこの判詞をほどこしていると書いている。嵐雪は、『莊子』を基に一名『南華真経』と言われた『莊子』を芭蕉は我々、門弟に「俳諧無尽経」として説いていると記し、芭蕉の『莊子』への傾倒がピークに達していたことをこの序文で伺わせる。

また、其角は『東日記』（延宝9年、夏、才磨序）の中で深川を「瀟湘八景」の、「瀟湘夜雨」に見立てて、次のような句を詠んでいた。

題江戸八景

其角

住むべくばすまば深一川ノ夜ノ雨五月

この発句は、芭蕉の「たんだすめ住めば都ぞ今日の月」（『続山井』寛文7年刊）を念頭に置いて作られている。芭蕉の場合、「今日の月」（旧暦の8月15日の名月）を眺めながら、「たんだ」と「住めば都ぞ」の俗謡（ともに『松の葉』）の当世語を裁ち入れて、「住めば」を言い掛け（「澄めば」も効かせて）の形で整え、「住めば都」の俗謡の自得の感慨がこの句では述べられている。また、実際に歌われることを想定したものである。尾形仇氏^[34]によれば、瀟湘八景に擬して、近江八景を選び、地名を確定して命名したのは、明応9年（1500）近衛尚道だったという。「夜雨」は近江八景の場合、「唐崎」である。其角は、この「唐崎」を深川に換えたのだった。

大切なのは、芭蕉庵の回りに中国の土地の風景を見出し、莊子にのめり込み、政治性を切り捨てられた杜甫や、李白を「さび」の詩人と理解し、隠逸趣味というものを蕉門の連衆が

享樂してたという事実である。

ところで『野ざらし紀行』を受けつつ、第二次芭蕉庵での穩逸趣味の理想を語り、最後にドンデン返して、それを相対化したのが『あつめ句』（貞享4年秋）であるが、以上、それについて述べる。

『あつめ句』は、天和元年から貞享4年までの7年間、特に貞享3、4年を中心に芭蕉の発句、34句（春13、夏9、秋5、冬7）を穩逸生活の理想というテーマのもとに構成し直されたものである。それは「かしまの記」とセットの形で「鯉屋」（杉山杉風家）に伝来した卷子本で第二次芭蕉庵の提供者、杉風へ「謝恩の一巻」^[36]として、送られたものであると現在、考えられている。

井上敏幸氏によれば^[36]、『野ざらし紀行』（甲子吟行画卷）は — 詞書が発句より一段下げて書かれてあって四季句集として構想されていたわけだが — 秋の発句だけで占められている大垣までの前半の紀行文的発想と大垣以降の詞書の字数のきわめて少ない冬春夏の発句で構成される四季部立的発想の後半部とで構成されている。芭蕉はその混淆した不統一に気付き、貞享4年の秋の段階で、切り離すべく、紀行文的発想のものは『かしまの記』に、四季の部立的発想は『あつめ句』にして作品化したと考えられている。『あつめ句』と『かしまの記』が同じ卷子本で、しかもほぼ同時期に完成されたのはその故だという。即ち、『野ざらし紀行』の前半部と後半部を切って、前半部は「記行の式」の『かしまの記』になり、後半部は四季の部立の『あつめ句』になったと言うのである。しかも、『あつめ句』で秋の発句が少ないのは、『かしまの記』がその分を補っているからだと考えられている。

ところで、周知のように『あつめ句』は、前述したように、天和元年から貞享4年までの句が隱逸の理想生活という統一テーマのもとに編集され、『野ざらし紀行』の後半部から抜かれた、貞享2年の前年の暮れから伊賀の故郷で越年した正月の句で始められている。

誰が聳ぞ菌朶に餅負ふうしの年

芭蕉はこのことによって、庵住生活を形象化した『あつめ句』が『野ざらし紀行』の「旅」を受けて執筆していることを最初に明確にしようとしたと考えられるのである。

『あつめ句』を読む際のポイントは、次の句、「またのはるはあむにありて」の詞書を持つ「いくしもにこゝろばせをの松かざり」にあると思う。この句はもともと、『貞享三年其角歳旦牒』には、「めで度人の数にも入らんとしの暮」を歳暮吟とし、「いくしもに」はその直後に、歳旦吟として入集していたものであった。芭蕉は『あつめ句』で並べ換えるに当たって意図的に逆にしたのである。『あつめ句』の最初と最後に、この2句を逆にして置いて、外から枠をはめるようにしたのは、次のような意図に基づくものであったからだと思う。まず、「いくしもに」の句では、幾星霜を経ても自分の気持は、松かざりの松にあやかって己の節操を貫き通す「高潔の士」でありたいと詠む。漢詩では、「松」は「高潔の士」の象徴^[37]であった。もちろん、「ばせを」に芭蕉が、「松」に松尾の松が掛けられている。『あつめ句』

より前に執筆されたと推定される、土芳自筆の『蕉翁句集草稿』には、次のようになっていた。

乞て喰、貰ひてくらひ、さすがにとしもくれければ
 めで度人の数にも入らんとしの暮
 さればこそ
 幾霜に心ばせをの松かざり

この場合だと、門人の援助によって生活が安定しているから、「志堅固でいよう」ということになり、弱くなる。この前の箇所をはずすことによって、「松かざり」の「松」にこめられた、「こゝろばせを」の心意気の強さが表現されるということになる。

また、『あつめ句』で「めで度人の」を一番、最後に持って来たのは、「こゝろばせをの松かざり」の決意を序として、その後が続く、隠逸の悦楽の世界に冷水をあびせかけて、現実の自己を凝視したからに他ならない。今少し、以下、『あつめ句』の世界を見てみよう。

ふるはたやなづなつみゆくおとこども
 おきよ〜わが友にせむぬるこてふ
 るすにきて梅さへよそのかきほかな
 またもとへやぶの中なる梅花
 さとのこよ梅おりのこせうしのむち

「ふるはたやなづなつみゆくおとこども」は、芭蕉庵周辺の現実の景ではない。「ふるはた」は歌語であり、古来、和歌の世界で正月に「なづな」を摘んでいた女たちの世界を男に置き換えた所に俳意を示そうとした。芭蕉は最初にこうした風狂の世界に興ずる「おとこども」＝門弟をまず提示したのである。即ち『野ざらし紀行』の旅の延長線上でこの句は詠まれているのである。

次の「おきよ〜わが友にせむぬるこてふ」は「ぬるこてふ」（胡蝶）にポイントがあり、莊子の分身である「胡蝶」に莊子の境地を共に共有したいと呼びかけているのである。天和期の句を、ここに入れて、芭蕉庵の回りに飛び回っている「蝶」の景を配したのである。

次の2句、「るすにきて梅さへよそのかきほかな」と「またもとへやぶの中なる梅花」は、井上氏の言うように「訪友不遇」と「喜友見訪」^[38]の詩題を発句にもどいたものである。そして、その梅の庵住とは芭蕉自身であり、「梅妻鶴子」として独居生活を楽しんだ隠逸の高士、北宋の林和靖（967-1028）に自己をなぞらえている。次の「さとのこよ梅おりのこせうしのむち」は、芭蕉庵の近くに悪童連中を登場させて、梅の枝、一本だけでもよいから残しておいてくれよと、牛のむちにすするからという意の句を詠んだ。これも实景ではない。井上氏の言うようにこの句は、『古文真宝前集』所載の杜甫の「茅屋為秋風所破歌」を使って、「群童」を「里の子」に換えて、芭蕉庵に悪童を現出させたのである。何故、このようなこ

とをしたかと言うと「牛の鞭」を導き出したかったからである。白石氏はこの句の背後に「禅林の十牛図」^[39]があることを指摘されたがその通りである。ところで、「十牛図」とは、禅林での悟りを10枚の図と偈頌と短文で示したものである。白石氏は、この10枚のうちの6枚目の「騎牛帰家」のイメージをこの句の背後にあることを指摘したが、これは、あやまりである。「十牛図」は逃げた牛を探す（「尋牛」）所から始まるので、鞭を確実に持っているのは「尋牛」の第一図^[40]だけである。第6図は牛の背中にまたがって笛を吹いている図なので6図の「騎牛帰家」の白石氏の指摘は誤りである。それではこの「牛」とは何を指すか。それは「悟り」である。この句は、一方では田園の悪童と遊ぶ陶淵明の桃源郷の世界を芭蕉庵の回りに創出し、他方では、これから牧童よろしく、牛(悟り)を求めて行く禅林の修行者の自画像をも描き出している句なのである。

ふる池や蛙とびこむ水のおと
 はらなかやものにもつかず啼ひばり
 永き日もさえづりたらぬひばり哉
 花さゝめて七日つるみるふもと哉

芭蕉庵に春の小動物を点綴した4句である。「ふる池や」の著名なこの句は、『野ざらし紀行』の旅の翌春、貞享3年閏3月に刊行された「蛙」題、二十番句合『蛙合』の、編者たる仙化とつがわされた巻頭の句である。このつがわされた一番の判詞（ジャッジ）の評をみると、この「蛙合」は、芭蕉のこの句がキッカケとなって、二十番の句合になったことが分かる。

この句は、芭蕉生存中に出された支考の俳論書、『葛の松原』（元禄5年）の記事によって、即ち、上五を其角が「山吹や」に換えたことで、（和歌伝統においては「井出の玉川」を紹介して、「山吹」と「蛙」は連想語になっていたこと）そのこととの関連（和歌伝統）で、この句は、和歌の世界で伝統的に詠まれて来た「鳴く蛙」ではなく、『蛙合』で詠まれた様々な「動く蛙」の代表句として詠んだとされそこに「滑稽と新しみ」があるとの解釈が示された。そうすると「一瞬の水音にこだわる従来の解釈は意味がなくなる」ことになる。よって「水音は一瞬のものでなく、断続的に聞えている」^[41]と解釈されることとなる。だが、はたしてそれで良いのだろうか。

井上敏幸氏は、芭蕉たちが読んでいた中国の作詩作法書『円機活法』巻五人品門の「隠者」の項に「鳴蛙」の語があることを指摘され、巻八昆虫門の「蛙」の項に「古池」の中で「鳴く蛙」の詩の例をも挙げて、「古池や」の句は、この漢詩パターンによったのではないかと推測した^[42]。井上氏の言うように芭蕉は、「隠者」生活の「古池」と「鳴蛙」の連想を「古池」と「飛びこむ蛙」に換え、蛙が飛び込んだ「水音」によって、かえって前後の静寂さを強調し、詩題の「閑適」（静閑安逸）を発句にもどいて、隠者生活の悦楽をこの句で表現しようとしたのではなかろうか。従って、この発句は、蟬の声によってあたりの静寂さがよりいっそう感ぜられるという、『おくのほそ道』の立石寺での旅中吟で、次のように

落ち着いた「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」の先蹤作^[43]ではないかと思われるのである。

一茶が博物学の隆盛によって小動物に注目し、句を詠んだように、芭蕉の、「小さな生命への関心の背景には、荘子的な『物皆自得』」^[44]の思想が実はあったのである。

次の「はらなかやものにもつかず啼ひばり」は、『莊子内篇』『第一逍遥篇』の何ものにもとられることなく9万里の天空をかける大鵬を小動物「ひばり」に換え、託して詠んだもの。实景ではない。「永き日もさえづりたらぬひばり哉」は、「ひばり」の「性」に人智を超えた意志を見、そこに「ひばり」の「自得」した悦楽を読みとっている句。即ち「物皆自得」（『蓑虫ノ説』跋 貞享4年秋）の思想によって「ひばり」を凝視した句である。「花さゝめて七日つるみるふもと哉」は、もともと尾花沢の紅花商人、清風の江戸の仮寓での挨拶吟だったが、ここに入れたもの。孤高で俗塵さのないイメージ（漢詩）で詠まれてきた「鶴」を清風に見立てた句であったわけだが、ここに置くことによって、庵主の自分（芭蕉）を「鶴妻梅子」の林和靖の高潔な士に仕立て上げた。

はなのくもかねはうへのかあさくさか
 ふるすたゞあはれなるべき隣かな
 ほととぎすなく〜とぶぞいそがはし
 時鳥むつきは梅の花さけり
 ほととぎすまねくか麦の村お花

「はなのくも」は、すでに指摘されているように^[45]「和漢朗詠集下」を踏まえて、この場所が「閑居」であることをまず示す。そして「花の雲」で、この草庵から「吉野の花」に見まがうほどの「花」が見える場所であることを更に提示し、「かねはうへのかあさくさか」で、能因の「入相の鐘に花ぞ散りける」を暗示し、落花を嘆く、この庵主の風流者の横顔を紹介した。

「ふるすたゞ」の句は、春の最後の句として位置付けられており、「春の部の終りに送別の句を置く発想は」「漢詩に倣」^[46]ったものであり、それにかこつけて、惜春の情を述べた。

「ほととぎす」の句は、前の「ひばり」の句と並んで、「物皆自得」の世界観をリフレインし、次の2句は、時鳥の初音を望む、和歌伝統にのっとり詠んだ。「時鳥むつきは」の句は、正月は梅の花がいち早く咲いたのに、いまだに初音を聞かせない。早く聞かせてくれの意。この句は西行の「ほととぎす花橋になりにけり梅に薫りし鶯の声」を踏まえており、「鶯」と「橋」が描かれて、典型的な談林の手法に基づく句となっている。この句で芭蕉庵の庭の花橋に止まっている時鳥を出し、次の句で芭蕉庵の回りに麦畑を現出させた。「むら尾花」は和歌の世界で雁を招くというが、穂麦は、時鳥の初音を招きよせることができるだろうかの意。ともに旧作だが、草庵の回りに時節の植物を配するためにここに持って来た。時鳥の初音を待ちわびる風流人の心情を句にしたのである。

さみだれに鳩の浮巢を見にゆかむ
 髪はえて容顔青し五月雨
 いでや我よきぬのきたりせみごろも

「五月雨」はもとは江戸俳壇のパトロンだった内藤露沾公への挨拶句で歌枕の地、琵琶湖の「鳩の浮巢」を見に参りますという句であった。それを『あつめ句』のこの場所へ持って来ることで、『冬の日』の風狂の人物のパーソナリティーを庵主に付け加えた。「髪はえて」は、「五月雨」で外に出られなく、顔面が蒼白になり、髪の毛も伸び放題の庵主を戯画化した。『芭蕉翁句集』^[47]によれば、「病中自詠」の詞書があり、病中で詠まれた句であることがわかる。また、井上氏によれば、『円機活法』卷十二人事門「病起」の項には「蓬頭」「垢面」^[48]の熟語が並んでいるということである。芭蕉はこの漢詩のイメージを使いながら、病中の自画像を戯画化したのである。よって、次の「いでや我」の句の詞書、「門人杉風子夏の料とて かたびら調し送りけるに」は、杉風の病気見舞に対する軽い蝉の羽のような衣を送ってくれたことへのお礼の挨拶句と解される。3句目の「いでや我」に病気全快の喜びが表現されている。

ゆふがほに米（つき）やすむ哀なり
 酔て寝むなでしこ咲る石の上
 瓜作る君があれなと夕すゞみ

「ゆふがほに」は病後の庵主の市中の徘徊での属目を詠んだ体である。重労働で休んでいる「米つき」男に哀れさを催したという意だが、源氏物語の「夕顔」の巻に、京の場末で光源氏が夕顔に会って、隣家から「唐臼」の音が聞えてくるという場面を踏まえて詠まれている。『源氏物語』の京の場末の景を江戸の市中に持って来て、現実の米搗男を登場させて、俳諧化した。この句に「六祖のイメージがあった」^[49]とする説があるが当たらない。

「酔て寝む」は「酔て」「石の上」に寝る隠者の発想から作られた。これは、「酔石」、「醒石」と言い、『円機活法』卷四地理門「石」の項に陶淵明の故事を引いて、「淵明嘗酔眠其上。名之曰酔石」^[50]とある。石から石竹の別名を持つ、「撫子」が浮かんだ。中国の隠逸の士に自己をなぞらえようというわけだ。

次の「瓜作る」には「むぐら生しげる古跡をとひて」の詞書から、戦争に破れて無官になって瓜を作った東陵侯の俳^[51]が指摘されているがその通りであろう。それに続く「君があれな」は西行のよく使う措辞で、夏の「夕すゞみ」にもういない隠逸の友を思い出して「いまいてくれたら」と感慨を述べた句である。

蓑虫の音を聞にこよくさのいほ
 雲おり〜ひとをやすめる月みかな

夕月や池をめぐりてよもすがら
あけゆくや二十七夜も三かの月
もの一つ我がよはかるきひさご哉

秋の発句は五つで、「蓑虫の音を」と「もの一つ」は、友人の素堂のこの二つの句に対する文章と五言絶句があり、それを粹とした。

「蓑虫」の句には、これに感興を催して、素堂が草した一文に芭蕉がコメントをしている。そのコメント（「蓑虫ノ説」跋）の中で、莊子の思想を背後に持った程明道の「物皆自得」等の様々な意味を芭蕉が込めていたことを我々は知るのだが、『あつめ句』ではすべて捨象されている。それらは、「くさの戸ほそに住わびてあき風のかなしげなるゆふぐれ、友達のかたへいひつかハし侍る」という詞書によって、「蓑虫」の句は西行の「わび」の世界に完全に転換しているのである。

次の2句は中秋の名月を詠んだ句。「雲おり〜」の最初の句は、評家が指摘しているように西行の「なかなか時々雲のかかるこそ月をもてなす限りけれ」を踏まえて、名月を賞美するのに月を隠す雲を持って来て、「月をもてなす」を「人を休める」と俗化した所に俳諧の表現がある。次の「名月や」は、「推敲」の故事（『唐詩記事』）の中唐の詩人賈島の俳を宿しながら、名月に一晩中、池の回りをうかれ歩く、風狂人の庵主の姿を写し出した。次の句は、もう一つ三日月を読むために入れられた句で、白石氏によれば^[52]、「漢詩の常套句『残月新月ノ如シ』の和訳」だという。談林手法にのっとった機知的な句である。

最後の「もの一つ」は、先ほど述べたように、芭蕉庵に米を入れる瓢箪があって、友人の素堂に銘を乞うたエピソードがあって、李杜の交友に寄せての銘の由来の五言絶句に触発されて作られたものである。『あつめ句』の中では、詞書でそれらのことは言及されず、「ひさご」に込められた、「ひさご」以外に何も持たない自分の人生の身軽さを表現した句となった。

かさもなき我をしぐる、かこは何と
花みなかれてあはれをこぼすくさのたね
水寒く寝入かねたるかもめかな
はつゆきや幸庵にまかりある
初雪や水仙のはのたはむまで

「かさもなき」は、『野ざらし紀行』の途中吟の下五を改めて『あつめ句』へ入れたもの。庵住の主人が笠を持たないで初冬の市中へ出た時の句とした。「こハ何と」と困った様子を口語で表現することで、「時雨」に実は興じている。「花みなかれて」は、井上敏幸氏によれば^[53]、「瓜作る」の句の前に記された漢詩題であったものがここに移し換えられたものだという。『源氏物語』の一場面を思い出させるこの句は、かつて栄えた大店が没落して、空地には地にこぼれた草花の種ばかりだとし、それが哀れを誘うと江戸の市中の景に転じた。

次の「水寒く」は、「元起和尚より涌〔酒が〕をたまはりけるかへし」の詞書で、冬の寒さで眠れない庵主が、和尚の酒でやっと寝入ることが出来ると鷗に自己を詫して、お礼を述べた句。『あつめ句』にしかないのが、厳冬を表現するためにわざわざこしらえた句であろう。元起和尚もフィクションであろう。

「はつゆきや幸」の句の「はつゆき」という季の詞は、芭蕉がはじめて、ここ『あつめ句』で用いた^[54]。この「はつ」の使用が「旅人と我名よばれん初しぐれ」の「初」を導き出すことになる。この「はつゆきや」の句は、詞書によっても、風狂の庵主の心のはずみを表現したものであることが分かる。次の「初雪や」は属目の景であるが、これまで表現されたことのない画期的な句。「景気」の句で、しかも「たはむまで」と動きが表現され、元禄期以降を先取りした句。いずれにしても庵主の自足した気持が表現されている。

そして、最初に述べたように、そうした庵住生活は「もらふてくらひ、こふてくらひ」という門人たちの支えがあって成立していることを明かし、「めでたき人のかずにも入む年のくれ」と自嘲し、「月雪とのさばりけらし年の暮」の最後の締めくくりは、『あつめ句』によって形象された庵住思想が、芭蕉によって全面的に肯定されたものではないということを示している。これが後に、『おくのほそ道』の旅を経て、『幻住菴記』とつながる。最後に、『幻住菴記』の庵住思想を見て、この稿を終わろうと思う。

芭蕉は『おくのほそ道』の旅を終えて、翌年の元禄3年の4月から8月まで、湖南の門人で膳所藩士の曲水が提供した、近江の石山の奥の、琵琶湖の周辺が一眺できる、国分山の中腹の幻住庵に、病気療養も兼ねて、4ヶ月余りを過ごした。そこで推稿を重ねて出来上がったのが『幻住菴記』である。これは、後に『猿蓑』に所収され、芭蕉が生前、公表した唯一の俳文である。元禄3年の9月13日付、凡兆宛書簡、並びに10月21日付、嵐蘭宛書簡によって、『猿蓑』に一門の「俳文集」を項目として設けることが計画されていたことが知られる。結局、計画は流れてしまったが、『幻住菴記』が唯一つ生かされて、『猿蓑』に掲載されることとなった。この計画は後に『本朝文選』（許六編。宝永2年）となって結実し、芭蕉の俳文は、「松島賦」「銀河序」等とともに、「幻-住菴ノ記」が「記類」の二番に入っている。

『本朝文選』はもちろん『本朝文粹』（藤原明衡編。平安後期成立）にならった命名で、編纂の枠組も「古文後集」^[55]を踏襲したものだ。ところで『幻住菴記』が「記類」に入ったように、和漢の伝統の「記」の文体を意識しつつも、俳文としての「記」のスタイルを確立しようとしたのが『幻住菴記』であった。原則としては、鴨長明の『方丈記』にならい、最初と最後の箇所には、『本朝文粹』に所収された慶滋保胤の『池亭記』と豊臣秀吉の北政所の甥である大下長嘯子（後に京の東山と西山に住む）の『拳白集』（慶安2年刊）が効果的に引用されている。

俳文としての「記」の文体を確立する為は何度も推稿を重ねるとともに、去来の兄の儒医向井元端に『幻住菴記』の草稿について、伺いを立てているのも、「実文にたがひ候はんは無念の事に候」^[56]という事情からだった。白石氏によれば、「実文とは、<道>の意識に支えられた和漢の正雅な文章を指すらしい」^[57]。

この書簡は、『猿蓑』に所収される前の草稿（米沢家本）に対する去来のコメントに対する芭蕉の弁解と、それを元に訂正した稿本についての兄の元端と、加生（凡兆）に対する添作の意見を求める内容からなっている。この書簡から、①長明の『方丈記』を下敷にしたこと、②去来のコメントによって、米沢家本では、最初に置かれていた、「幻住菴」に移り住むことになった経緯を省いたこと、③それは、『方丈記』の「新都の躁動、火事・地震の乱れ」等の記述があったためであること等がわかるのである。

俳文としての「記」の文体を確立して、自己の庵住思想の理想を述べた『幻住菴記』の記述と相違して、幻住庵に入った早々から、「秋末まではこたえかね」（耐えることは出来ない）とか、「つま木拾ひ清水汲事ハいたミて」（つらくて）と愚痴を4月10日付の書簡で大垣の門人、如行にこぼしている。また、『幻住菴記』の記述と相違して、手紙や、『猿蓑』に所収された『凡右日記』によって、門人の支考が薪水の労に服し、入れ替り、立ち替り門人が訪れ、芭蕉自身も大津、膳所、京へ出かけて、滞在していた。『幻住菴記』はその意味でフィクションの、庵住思想の理想を語ったものだったのである。庵住思想は完成したが、曲水の好意は結局、有難迷惑だったのではなかろうか。如行のこの書簡にある、芭蕉の「持病下血など」がなかったら、この庵に止まることもなかったが、『幻住菴記』の庵住思想もまた完成されることはなかっただろう。

『猿蓑』所収の「幻住菴記」で少し見てみると、最初の出だしを、長嘯子の「山家記」（東山）にとって^[58]、「幻住菴」の由来を説明し、入庵前の経緯を『方丈記』のそれとを較べて大幅に圧縮して述べる。「さすがに春の名残も」からは幻住菴から見える景の描写だが、この最初の描写も「山家記」（西山）から借りているが^[59]、枠組は『方丈記』に負っている。琵琶湖の景は、杜甫の「岳陽樓ニ上ル」の「岳陽樓」から眺望された洞庭湖に見立てられ、その回りに近江八景のいくつかを点綴し、歌枕の他に俳諧や『万葉集』の地名も出して、文学を通して理想的な風景を並べた。

「猶眺望くまなからむと」で始まる幻住菴での行動は、「山家記」（東山）から、また借りるが^[60]、その行動は和漢の隠逸の詩人（黄山谷、西行）にその典拠を負っていて、生活を芸術化する形で理想化される。その後、前居住者の曲水の伯父への挨拶 — 「はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて」 — があって、『方丈記』を意識した、庵の「仏間」を中心とした居住スペースのあり方に筆が及ぶ。

「さるを」で始まる箇所では、「幻住菴の三字」の揮毫を頼んだ「筑紫高良山の僧正」が、京の「加茂」神社の「甲斐何がし」の令息であることを明らかにしているのは、直前の長明の『方丈記』の記述を念頭に置いて記したことと無関係ではなかろう。この後、『方丈記』よろしく、しつらいの調度が紹介され、長明のような仏具一式ではなく、旅（＝芭蕉の理想）に必需の「檜笠」と「蓑」であるのは象徴的であった。その後の、孤独な隠逸生活の無聊をまぎらわすために折よく「里のおのこ共」が尋ねて来て、「農談」を交わすのは、隠逸の理想を上げるため文学の常套であり、それに従った。このフィクションの記述は、元禄3年8月に執筆したと推定される去来宛の書簡で、『古文真宝前集』所収の朱晦庵の「雲谷雜詠」

の詩の一句を、「書き改め」たことを自解しているが、実際には、前に述べたように、弟子たちが2泊、3泊と幻住庵には宿泊して行って、隠逸の生活とはほど遠かった。

「夜座静に月を待ては影を伴ひ」から始まる箇所は、次に一まとまりとして語られる自己の境涯の回想と現在の心境とを述べる箇所へと続く、つなぎの文となっている。この文の最後の「罔両」（影の外側に出来る半影）「に是非をこらす」の術語から、『莊子』「第二斉物論篇」を背景にしてこの箇所が語られていることが分かる。ところで『莊子』の中では「罔両」とその本体の「景」との対話を通して、時の変化、運命の流れに従うことの重要さが哲理として語られ、この直後の境涯を対話で語る形式と「花鳥に情を勞して」「此一筋につながる」芭蕉の生涯への感慨と達観を導き出した。

もちろん、この、『幻住菴記』の最後の箇所は『方丈記』にならったものだが、『方丈記』の世をのがれた出家者の理想像と現実の自己との対話形式での内面の葛藤を述べて、終わるのと相違して、莊子の哲理に最終的にはすがって終わる。

定稿となった『猿蓑』所収本の『幻住菴記』では、「米沢家本」が「初秋半に過行風景、朝暮の変化も、また是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」として、幻住庵を立ち去ってしまった事実を最後に置いた。それに対して、さきほどの去来の書簡で、「やがて立ち出でてさりぬ。難至極」の指摘を受けて、この部分を削除した。次に、『芭蕉文考』所収本で、『猿蓑』所収本の末尾に置かれていた「先たのむ椎の木も有夏木立」とともに、「頓て死ぬけしきも見えず蟬の声」の句もセットで置かれてあったのが、この無常を意味する観想句は、除かれることとなった。米沢家本の「頓て立出てさりぬ」が捨てられたのは、隠逸の庵住がライフスタイルとして理想的であることを書いて来たことと矛盾するからである。また「頓て死ぬ」の発句が除かれたのは、この庵住の世界が中国の隠逸の文人の世界を理想としたものであり、仏教の無常観に基づく出家から来る隠遁思想とは相入れないものであり、芭蕉がこの発句の仏教臭をきらったことによる。

ところで、定稿の『猿蓑』所収本の『幻住菴記』の末尾の一句、「先たのむ椎の木も有夏木立」は莊子文脈から発想されたものであるが、注目すべき点は「椎の木」の「木」である。

思い起こせば、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅の途上、当麻寺に立ち寄り、「庭上の松」を眺めて、無用の木ゆえ「斧斤の罪をまぬがれ」て寿命を保ち巨木になった、『莊子』「人間世篇」の話を思い起こし、「僧朝顔幾死かへる法の松」という発句を作っていた。

自己の生涯を振り返り、現在の心境を語り、「先たのむ」の発句で締め括った最後の箇所は、『方丈記』の他に長嘯子の「山家記」（西山）を典拠にして⁶¹執筆されたことが分っている。

「山家記」では、「かしこにあやしき桜あり」と始められ、その桜の木が『莊子』「人間世篇」の役に立たない「社櫟」に見立てられる。そして、それぞれ、皆、それぞれの命を生きているのでこの木の「不才を求め」ても仕方がないと記している。この箇所は、『幻住菴記』の中国の「楽天」や「老杜」に比して、自分（芭蕉）が「無能無才」であるにもかかわらず、「たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞し」「此一筋につながる」芭蕉の人生観を導き出

しているだろう。そうして、「山家記」の「かれ」（桜）を「よすがのあるじとたのむかげにてかどかれる翁あり」から、「翁」（長嘯子自身）を芭蕉自身とし、「桜」を「椎の木」に換えて、「先たのむ」の発句が生まれたのである。

『莊子』の「人間篇」の長嘯子の引用に芭蕉は我が意を得たことだろう。では、芭蕉が「桜」を何故、「椎の木」に換えたかと言うと、上野洋三氏^[62]が言うように「『椎の木』が、その花をほとんどかえりみられることのない木であること」と関係しよう。『莊子』の無用の櫟同様、「桜」のような春を代表する花を咲かせる木とちがって、誰にも注目されることのない花をひっそりと咲かせる「椎の木」は、芭蕉にとっての理想の花木であったし、現在の自分自身の姿であったろう。「無能無才」の自分を自己肯定してくれる唯一の木が「椎の木」であったのである。

『池亭記』『方丈記』『山家記』の系譜につながり、中国文人の隠逸の世界と莊子の哲理の思想とを大津の国分山に現出させたのが、『幻住菴記』であった。こうして、芭蕉が深川に移ってからの隠逸生活の理想境の文学化は、ここで完結することになる。

これまで、旅人概念と隠逸の、芭蕉にとっての二つのコアと言うべき問題について論じて来た。旅人では、理想の旅人像の概念の変化と拡大によって、『おくのほそ道』で永遠の旅人像として結実した。また、隠逸については、『幻住菴記』によって、その結論を得た。ともに、生活を芸術化することに心血が注がれ、その理想が追求された結果である。次回からはこの論拠を基に、芭蕉の発句と連句の展開のあとを追ってみようと思う。

（以下次号）

注

- [1] 井本農一・村松友次・久富哲雄・堀切実『松尾芭蕉集②』小学館（1997.9.20）173頁。
- [2] 白石悌三『芭蕉』花神社（1988.6.10）12頁。
- [3] 白石、同前 [2] 12頁。
- [4] 浅野晃・雲英末雄・谷脇理史・原道生・宗政五十緒編『講座元禄の文学3』勉誠社（1992.10.8）の85頁に「「侘人」は、西行の『山家集』にも見える歌語であった。」として、用例（和歌2首）があがっている。
- [5] 井本農一・堀信夫『松尾芭蕉集①』小学館（1995.7.10）88頁の頭注による。
- [6] 例えば、白石、同前 [2] の9頁の指摘。
- [7] 今栄蔵『芭蕉句集』新潮社（1982.6）57頁には「この世に生きるのも、宗祇が『時雨の宿り』と嘆いたように束の間のことで、まことに無常だ。」と解されている。
- [8] 栗山理一・尾形侑・山下一海・復本一郎『総合芭蕉事典』雄山閣（1982.6.20）82頁。
- [9] 白石悌三・乾裕幸編『芭蕉物語』有斐閣（1977.6.30）52頁。
- [10] 島居靖『芭蕉連句註解第三冊』桜風社（1980.6.5）266頁。
- [11] 井本・堀、同前 [5] 95頁。
- [12] 『芭蕉の本 第三巻』角川書房（1970.7.10）162頁。
- [13] 尾形、同前 [12] 163頁。
- [14] 『『笈の小文』への疑問』『文学』岩波書店（1970.4.5）

- [15] 『芭蕉・蕪村』岩波書店（2000.4.14）62頁。
- [16] 同前 [8] 401頁。
- [17] 『初期俳諧から芭蕉時代へ』笠間書院（2002.10.10）142頁～143頁。
- [18] 『初期俳諧の展開』「談林俳諧の類型化」桜風社（1968.6.25）
- [19] 『芭蕉Ⅱ』所収「『笈の小』の謡曲構成について」有精堂（1977.8.10）111頁。
- [20] 西野春雄、羽田昶編『能・狂言事典』平凡社（1987.6.24）264頁。
- [21] 『永遠の旅人 松尾芭蕉』新典社（1991.4.25）148頁。
- [22] 上野祥三『芭蕉の表現』岩波書店（2005.11.16）89頁。
- [23] 尾形竹『芭蕉の世界』講談社学術文庫（1988.3.10）206頁。
- [24] 尾形、同前 [23] 206頁。
- [25] 『芭蕉物語』森田蘭「去来と凡兆」有斐閣（1977.6.30）51頁。
- [26] 『芭蕉七部集』岩波書店（1990.3.20）262頁。
- [27] 森田蘭『猿蓑発句鑑賞』永田書房（1979.9.30）10頁。
- [28] 堀切実『おくのほそ道 永遠の文学空間』NHK出版（1996.4.1）20頁。
- [29] 同前 [5] 251頁。
- [30] 同前 [23] 258頁。
- [31] 同前 [23] 258頁。
- [32] 同前 [1] 172頁。
- [33] 『全釈芭蕉書簡集』新典社（2005.11.5）184頁。
- [34] 『松尾芭蕉』筑摩書房（1971.3.25）202頁。
- [35] 同前 [2] 18頁。
- [36] 『貞享期芭蕉論考』臨川書店（1992.4.23）88頁。
- [37] 『漢詩の事典』大修館書店（1999.1.15）644頁。
- [38] 井上 [35] 77頁。
- [39] 『図説日本の古典-14 芭蕉・蕪村』集英社（1988.11.25）58頁。
- [40] 上田閑照、柳田聖山『十牛図』ちくま学芸文庫（1992.11.6）190頁の図による。
- [41] 同前 [2] 33頁。
- [42] 同前 [35] 82頁。
- [43] 尾形竹氏（同前 [34]）は、この典拠になっている「閑適」の詩に、「蟬噪林逾静 鳥鳴山更幽」（王籍「入若耶溪」）をあげている。
- [44] 石川八朗（同前 [25]）24頁。
- [45] 同前 [5] 157頁。
- [46] 同前 [35] 86頁。
- [47] 『名家俳句集』有朋堂文庫（1927.11.26）121頁。
- [48] 同前 [35] 100頁。
- [49] 同前 [35] 102頁。
- [50] 同前 [35] 105頁。
- [51] 同前 [5] 163頁。
- [52] 同前 [38] 62頁。
- [53] 同前 [35] 105頁。
- [54] 同前 [38] 64頁。
- [55] 同前 [2] 105頁。

- [56] 去来宛、元禄3年8月上中旬執筆。
[57] 同前 [2] 103頁。
[58] 浅野晃・雲英末雄・谷脇理史・原道生・宗政五十緒編『講座元禄の文学3「俳文「幻住庵記」』
勉誠社（1992.10.8）228頁。
[59] 尾形仿『芭蕉・蕪村』岩波書店（2000.4.14）30頁。
[60] 同前 [57] 229頁。
[61] 同前 [58] 31頁。
[62] 『芭蕉、旅へ』岩波書店（1989.11.20）200頁。

Summary

The History of Haikai Expression on Syuko and Zyokei

Mikio Takano

Since Basyo retired to live in Fukagawa, Basyo repeated to make a journey and Anzyu that is to live in retirements alternately. For Basyo, the Journey and Anzyu were means to pursue the ideal of his life making a private life artistic. The Ideal of Journey was expressed and completed Okunohosomiti. And the Ideal of Anzyu was done by Genzyuanki in a similarly way.

Keywords Basyo, Hokku, Renka, Traveler, Anzyu

(2008年5月8日受領)